

キューバ、肯定の詩学と否定の詩学¹⁾

久野量一

0.

キューバの二人の詩人から、キューバ島をめぐる詩行を引用するところからはじめよう。
ニコラス・ギジェンは「熱帯での言葉」で以下のようにうたっている。

「(…) キューバはもう知っている、ムラート²⁾であることを。(…) Cuba ya sabe que es mulata!³⁾」

一方、ビルヒリオ・ピニエーラは「島の重み」で以下のようにうたっている。

「ぼくの国よ、お前は若すぎるから、定義の仕方を知らない！ ¡País mío, tan joven, no sabes definir!⁴⁾」

そして、この詩行ののち、

「お前 [キューバ] は光か幼少期のごとく、まだ表情がないのだ。Como la luz o la infancia aún no tienes un rostro.⁵⁾」

と続けている。

ここで前者のギジェンの詩を「肯定の詩学」と名付けることにしよう。そして後者、ピニエーラの詩を「否定の詩学」と名付けることにしよう⁶⁾。

本稿の目的はこの二つの詩学に基づいて、キューバがこれまでカリブのなかでどういうふう
に自らを位置づけてきたのかを大まかに整理しながら問題提起することである。

1.

最初の方の詩、ニコラス・ギジェンの引用からは、キューバがすでに自明の存在であることがわかる。「すでに」という副詞がおかれているところに見てとれるように、ギジェンはキューバが何者であるのかということ——ここではムラート——があらかじめわかっていることを前提としている（もちろんムラートの中身が何なのかを考えることも重要だがここでは踏み込まないでおく）。

ギジェンにはキューバをめぐる存在論的な葛藤はない。あるいはキューバの存在それ自体に疑問を挟むことをやめようとする姿勢がある。キューバの存在にはあらかじめ強度、あるいは重みが備わっている。そういう肯定の意志がギジェンをしてこのような詩行を書かせているように見えるのだ。だから彼の詩を「肯定の詩学」と呼びたいのである。

一方でもう一つのビルヒリオ・ピニエーラの方は、「ぼくの国」、すなわちキューバには「まだ表情がない」と言っている。したがって、キューバはいまだに輪郭が定まっていない。未分化な、存在が不確定なものとしてうたわれている。肯定の詩学に比べれば、これは虚無的な態度であると見なすことができる。キューバが何者なのかまだ分かっていないし、少なくとも自明の存在であるとはうたえない。ここには存在論的な葛藤がある。それゆえに「肯定の詩学」と対立させ、ピニエーラの詩学を「否定の詩学」と呼びたいのである。

どちらも20世紀前半、1959年のキューバ革命よりも前の、1930年代から40年代の詩だが、これから見ていくように、前者の詩、すなわち「肯定の詩学」はキューバ中心主義、キューバ大国主義の中核の思想になっている。

2.

キューバには強度があり、キューバは歴史上の磁場になっていて、土地として「キューバは重い」という考え方。この「肯定の詩学」をめぐる「キューバ」の歴史を簡略にまとめると以下のようなになる。

キューバはコロンブスによる発見からスペインによる征服、そして長い植民地時代があり、スペインとの独立戦争を19世紀の後半から第一次、第二次独立戦争を通じて戦ってきた。19世紀末になるとアメリカ合衆国が介入してきて、米西戦争があり、米国はグアムやフィリピン、プエルトリコを領有することで利を得たが、キューバはその米国支配から漏れることができた。

とはいえキューバはアメリカ合衆国にグアタナモ基地の建設を許し、半ば米国の傀儡としてしか独立を果たせなかった。その米国帝国主義を覆すかたちで民族主義的なキューバ革命があり、その後、革命体制は冷戦構造に組み込まれ、たとえばキューバをめぐるミサイル危機が起きている。冷戦体制は崩壊したが、キューバはいまだ共産主義体制を維持しているし、ポスト・カストロ兄弟の問題や、米国のテロ犯の収容所になっているグアタナモ基地の存在をめぐるキューバには常に注目を集めるだけの事象が起きている。

このように整理すると、たしかにキューバは世界史上戦われた戦争の当事者であったし、キューバ島は常にその前線になっている。キューバの「主役意識」を高める思想上のレトリック（肯定の詩学）が次々に生まれてくるのも当然である。キューバは歴史的にみて注目に値する独自性があり、他の国々とは異なった「特別な」顔を有するという考えだ。

19世紀のホセ・マルティを考えてみよう。独立戦争も闘って戦死した彼は、「われらのアメリカ」というタイトルの文章を残した。この「われらのアメリカ」という表現はいかなる疑問も付けさせずにラテンアメリカに一体性を迫り、大陸部に対する同調圧力とともに主役意識をかきたてている。この「われらのアメリカ」というタイトル、そしてその思想ほど、キューバを歴史上の主役に押し上げる働きをもった文章はないだろう。このような「ラテンアメリカ主義

のレトリック」を「キューバ人」マルティが書いたことによって、キューバはラテンアメリカの中心的な地域として浮上させられたのだ。言わばアジテーションとしてこの文章は機能している。こういう「主役意識」はスペインによる植民地主義やアメリカ合衆国による帝国主義に抵抗しようとするとき、ひととき強度を得る。主役意識によって抵抗運動は輝きを増す。

キューバは特別だという意識、これはその他の文化的、地理的な枠組みにおけるキューバ性の追求においても顕著な現象である。

たとえばキューバはスペインとの区別を強調する（スペインとイスパノアメリカは違う）。また、北米との対立も強調する（アングロサクソンとラテンは違う）。ヨーロッパを意識したときには非西洋性を持ち出し（ヨーロッパとは違う）、革命後の20世紀後半は第三世界性（アジアやアフリカと連帯する）を持ち出す。

このイスパノアメリカ性やラテン性、非西洋性、第三世界性は、ともすればイスパノアメリカの大陸部と重なってくるはずだが、といてキューバがいわゆるイスパノアメリカの大陸部に飲み込まれるかという、それに対してキューバは「違う」という答えを用意できる。それは「島嶼性」である。「キューバは島だから大陸部とは違う。人間も社会も歴史も、イスパノアメリカ諸国とは異なっている」のだと。

20世紀半ばまでの話に限れば第三世界性のようなものはまだ生まれていないので、その点はいったん留保しておくことにするが、20世紀前半期においてキューバのナショナルアイデンティティというものは、どんなときにも自明のものとして存在するように、いかようにも立ち位置が作られている。

当然そこには学術的に補強する人たちがいた。たとえばキューバ性を追求した人類学者（フェルナンド・オルティス）や芸術家（ウィフレード・ラム、アレホ・カルペンティエル）が、主に1930年代から1940年代にキューバを巡ってさまざまなテキストや作品を残している。キューバ詩の研究を行ったシンティオ・ピティエルや、キューバ人気質の研究を行ったホルヘ・マニャッチもこの時代の有力な「肯定の詩学」論者である。

人類学者オルティスは料理をメタファーにしてキューバを語り、キューバにおいてはアフロ系や中国系の文化、あるいはスペイン系の文化が混交していると言う。芸術家もまた、アフロ系や中国系、スペイン系の血を引く画家がキューバの熱帯を中心にした絵画を残している。芸術的な想像力のなかでは熱帯の密度が賛美され、文化の混交や変容が中心的な課題になっている。そのどれもが最終的に一枚に凝縮される「キューバ」の絵図を描きだすのである。

3.

以上のような「肯定の詩学」を打ちたてるときに重要になっているのが、反アンティール思想である。この思想はもしかすると、キューバがアンティール諸島のなかで領土として大きいという、実際的な理由によって生まれてきた一面もあるかもしれないが、20世紀前半期を通じてキューバではアンティールの他の島々を自分たちと区別する傾向が強かった（アンティール諸島の他者化）。アンティールは野蛮な島々で、自分たちこそ文明人である、であるからこそ、カリブ海のリーダーになるのはキューバなのだ、という論理である。

キューバ島は植民地時代以降、白人文化がしっかりと根をおろし、白人が数的にもマジョリティで、半ばヨーロッパ的な風土がある。それに対し他のアンティールの島々は黒人ばかり……というわけである。加えて政治的な経緯から見て、近隣のハイチやドミニカ共和国、プエルトリコの二の舞になってはいけない、真似をしてはいけない、という意味合いでアンティール諸島の事例を参照している。

キューバがカリブ海を支配できるのだという考え、大西洋におけるイギリスと、カリブ海におけるキューバが比肩される見方さえある。たとえばセサル・レアンテの短篇（「その共和国の名は？」）には、「われわれは、カリブ海を支配することも可能だろう。軍艦が数隻ありゃ、軽いもんさ」⁷⁾ というふうには、キューバ以外のアンティール諸島はあっさり征服できると見下した発想をする人物が出てくる。

この短篇は20世紀半ばのものだが、このような発想の淵源をたどっていくと、19世紀にまでさかのぼることができるかもしれない。フランス革命を受けて1804年、ハイチで革命が起きた。それまでハイチは砂糖産業で繁栄していたが、革命後のハイチの砂糖産業は壊滅する。そのおかげで、砂糖基地としてキューバは19世紀に繁栄していき、主に北米に輸出して経済的な恩恵を得ることになる。したがってキューバはハイチを失敗事例として眺めていたのである。

20世紀になると、キューバにはそのハイチやジャマイカから砂糖製造工場や農場で働く移民労働者が大挙する。大挙するハイチ人やジャマイカ人に対して排外主義的な論調が強まる。白人天国であるキューバが脅かされるのではないかという恐怖である。

キューバにおける反アンティール思想というのは、キューバ性をより確実なものとするためにむしろ必要なものであったようにも思える。奴隷蜂起は国としての統一性を脅かす危険な事態であり、キューバの自律性や（白人が支配することが前提の）国民国家としての統一感を損なうものでしかない。というわけで、「アンティール諸島はカオスである」という見方も生まれることになる。

4.

その後キューバ革命が1959年に起きるが、おそらく以上のような思想的な流れの延長線上で国民国家を作り上げることになったと思われる。このときに逃亡奴隷の英雄化が行なわれていることにも触れておきたい。

逃亡奴隷 *cimarrón*⁸⁾ というのは、農場から逃げ出した奴隷のことだが、彼らはパレンケという自治的な集落をつくって暮らした⁹⁾。革命体制はその逃亡奴隷や黒人と白人の混血であるムラートを、ナショナルなイメージのなかに統合してきている。そのときに、逃亡奴隷たちは独立戦争を戦い抜いた闘士であったということがとりざたされている。

そのコンテクストをつくりだしたテキストとしてもっとも有名なのは、キューバ人類学者ミゲル・バルネによる『逃亡奴隷』である。これは、とある100歳以上の元逃亡奴隷の話をもとに本人から聞きとってまとめた物語である¹⁰⁾。バルネ以外には、アフロキューバ系の詩人ナンシー・モレホンによって逃亡奴隷を礼賛する詩が書かれている（詩のタイトルは *Cimarrones*）。ここではその逃亡奴隷たちの自由への闘争が賛美されている。この詩では逃亡奴隷が目の前によみ

がえり、われわれ読んでいる人間に対しては、独立時における逃亡奴隷が植民地主義への抵抗者であるという格付けが行われている。

逃亡奴隷がポストコロニアルを象徴する形象だとして、あえてこの二つのテキストを深読みしておけば、革命体制は逃亡奴隷の存在を国民化、英雄化することによって新たな国民像を提示し、そのことによってキューバ性はひときわ自律性を獲得できたと見えなくもないのである。

以上のような流れが、肯定の詩学の概要だが、最初に引用したニコラス・ギジェンの詩は、歴史、政治、思想、人類学などのさまざまな成果とかかわりをもって組織されている「肯定の詩学」の一例であると言える¹¹⁾。

5.

それに対して、否定の詩学というのは、キューバ人には存在論的な葛藤がやはりあるのだという方向に想像力を働かせていくことだ。言い訳めくが、非常にわずかな例を文学のテキストからしか見つけることができない。ここではその若干の例を引用することで、今後の検討の課題としておきたい。

たとえば肯定の詩学のなかで賛美された熱帯は、否定の詩学のなかでは不毛や退屈、熱帯地方の退屈に置き換えられ、むしろ無変化であるということに光が当てられ、負のイメージを負わされる。言い方を変えれば、この否定の詩学では島全体は非常に呪わしいものであって、島への呪いを告発する詩になっている。

肯定の詩学ではキューバ島が象徴的な意味で非常に重く、キューバには重力が働いているのだと見なされるが、それに対して否定の詩学のなかで重要になるのは、キューバは「軽い」のだという考え方で、最初に引用したビルヒリオ・ピニェーラは同じ詩の一節に、「ニュートンは恥ずかしくて逃げ出してしまう Newton huye avergonzado¹²⁾」という表現を用いている。ここではキューバには重力が働いていないのだという、島の軽さが強調されている。先に引用したセサル・レアンテの短篇には、キューバは強いという論理とは逆に、「キューバ島はコルクのように軽い」のだと言う人物も登場するが、これはピニェーラの流れを汲むものとして読める。

キューバが大国であることも虚偽であるとされる。イギリスと比肩するというのはあり得ないというような意見は、本稿で引用を続けているレアンテの短篇に見つけられる。「キューバをイギリスと比肩するという考えは、われわれ自身がつねづね妄想しているわが国の偉大さという錯覚から出ているのさ。〈メキシコ湾の鍵〉〈西インド諸島の要塞〉〈新世界の入り口〉それらは、わが国の伝統的な貧困を隠蔽するいつわりの言葉だよ。」

ここで言われている貧困とは経済的な貧困のことでもあるのだろうが、文化的な貧困も指しているようにも見える。肯定の詩学のコンテクストでは、キューバ文化というもののは確固としたものであり、それがたとえば（レサマ＝リマやカルペンティエルのような）バロック的な表現のなかで豊穡に実現されていたと考えられる。先に名前を出した文芸批評家のシンティオ・ビティエルもまたそのような考えの持ち主だ。しかし、否定の詩学のなかではバロックはヨーロッパ産のものであり、そういう旧大陸の文化的伝統をいつまでも後追いつていることこそキューバの文化的な貧困を証明しているじゃないか、ということになる。

ただ、こうして否定の詩学を考えていったとき、どうしても気になってくるのは、キューバに重みがあると考えると、そのあとに初めて軽さが見えてくるということだ。そしてこの軽さもまたある意味では、キューバの独自性、あるいは優位性を語っているというふうにも読めないことはないのではないか、これもまたひとつの「肯定の詩学」なのではないか、と。それに、「否定の詩学」は作品内部における解釈のレベルの話であって、そこまで踏み込むには何かしらの前提が必要なのではないか、と指摘される危険もある。あるいは「重い」と「軽い」の弁証法を繰り返していくと、その先に何かしら真理があるとでもいうように予感させてしまいかねない。

そういう危険があることは重々承知の上であらためて指摘しておきたいのは、キューバ文化をきれいな一枚の絵として描き出せることを盲目的に信じているのが「肯定の詩学」であり、それに対して懐疑的な態度を挟んでいるのが「否定の詩学」ということである。

したがって「否定の詩学」はキューバを一定のまとまりとして、統一性があるものとして把握することの拒否であって、ここには多文化的な想像力、あるいは多文化的な世界観が生まれているように考えられる。ここでは、そういうアイデンティティの提示がある作品群（小説など）を今後の議論のためにとりあげておきたい。特にそういう小説のなかでは、人種、あるいは文化的、それから宗教的な境界が際立たされるような語りが用意されている。

カブレラ＝インファンテの『平和のときも戦いのときも』は短篇集だが、このなかには、ムラートや白人、黒人の発言、また彼らのアイデンティティの葛藤が並列されていく場面がある（「間違いのバラード」や「グラン・エクボにて」）。しかもストーリーとして落ちのようなものが用意されたり、読んだからといってカタルシスが得られるというわけではなくて、ただ漠然とわかりあえない他者同士というイメージが並列されるだけだ。とくに白人の眼差しからの他者としての黒人、黒人の宗教や宗教の儀礼が描かれている。

どうもこの短篇では、ギジェンの詩やラムの絵画などで得られた、わかりきった単一のキューバ性のようなものが分裂の危機にさらされるのだ（その意味では、セサル・レアンテの短篇も同じ系譜に属するのかもしれない）。どれほど雑多のものをとりまぜていっても、結局ひとつのものに収斂していく完成図になってしまうのと、雑多のものが入ることでどう見ても未完成になってしまうものとの差は何に起因するのか、ここでは説明できないが、ひとまず後者の方には、他者同士が不満をたらたら述べ合いながら島という場所でいやいや同居しているのだというやり切れなさのようなものが感じとられ、そのことがある種の否定感覚、ノーの感覚を呼び起こすのだと言っておきたい。

ややありきたりなまとめ方になってしまうが、こういう否定の感覚は、テキストのテーマが逃亡であるとか、拡散であるとか、分裂、あるいは主体性の喪失とでも言えるものになっていることも指摘しておきたい。

これらの物語、ここで否定の詩学だと読み得る物語のなかで、人間はそもそも目的があると言うよりは目的がないような生き方を強いられていて、非常に無残な死を迎える。あるいは主体性を奪われ、その取り戻しには失敗していく物語構造になっている。テキストに明示的なレベルでのテーマとしては、都市のなかでの徘徊や逃亡、そして脱出（亡命、あるいは、引きこもり）になっている。形式的なレベルでは、テキストが断片化されるとか、あるいは複数の落

ちが用意されている。

6.

最後にさらに深読みしておけば、キューバで肯定の詩学が確立したことや、またそれに相對する否定の詩学が生まれたことは、カリブ海地域における、とくにキューバのポストコロニアル的な歴史事情と無関係ではないということも言っておきたい。

先に少し触れておいた逃亡奴隷のことで言うと、私見によればカリブ海地域における最初のポストコロニアル的な存在が逃亡奴隷であって、キューバは20世紀後半期の革命によって抑圧下から強制的に生まれた彼らの存在を奇蹟的に英雄化することができた。そのことで、19世紀からの独立運動にはじまるキューバ性の探求をひとつのストーリーにまとめあげることができたのである。そしてそのストーリーにどっぷりつかるところからキューバを知ってしまっている者としては、その呪縛から逃れることはとても難しい。

しかし、革命前あたりまでに限定して、ここで引用したテキストで言うとピニェーラの詩とカブレラ＝インファンテの短篇あたりまでで言えば、キューバ文化はそんなに一枚岩ではなかった、つまりポストコロニアル的な状況下では、逃亡奴隷の存在を「肯定」的な意志をもって書くことは難しかったのではないかということだ。言い方を変えれば、逃亡奴隷とはそんなに簡単に礼賛できるだけ距離の遠い存在ではなかったのではないか、彼らを描くことはまさにポストコロニアル的な状況下にいる自分たちを書く行為だったのではないか、と想像したくなるのであり、彼らを描くことには少なからぬ痛みが伴ったのではないかとすら思えるのである。

とはいえ、本稿ではここまでを言い切るのには難しいのでそれについては機会を改めたい。さしあたり、否定の詩学に注目が集まるようになったのは、21世紀に入ってからであり、なぜ否定の詩学をとりあげようとする人が出てきたのかといえば、キューバ史を再構想するときに出てきたということだ。そして、否定の詩学というのは、必ずしもテキストに明示的に現れるのではなく、沈黙のなかで表現される場合もある（つまり意見を公けにしない、という意味の表現活動）¹³⁾。

付記：発表では触れられなかったが、カリブ海地域における文化的な交流に関する資料について、キューバが発信しているものを以下に提示しておきたい。

・キューバの文化機関「カサ・デ・ラス・アメリカス」が発行している国際文芸誌 *Casa de las Américas* では、アンティール諸島の知識人の発言が掲載されたり、アンティール諸島の特集がたびたび組まれている。

- ① *Casa de las Américas*, número 48, 1968 (C.L.R. ジェイムズの論考掲載)
- ② *Casa de las Américas*, número 70, 1972 (プエルトリコ特集)
- ③ *Casa de las Américas*, número 86, 1974 (英語圏カリブ文学に関する論考掲載)
- ④ *Casa de las Américas*, número 91, 1975 (英語圏カリブ文学特集)
- ⑤ *Casa de las Américas*, número 96, 1976 (ブラスウェイトの論考掲載)

- ⑥ *Casa de las Américas*, número 114, 1979 (79年のカリフェスタにおける講演録掲載)
- ⑦ *Casa de las Américas*, número 118, 1980 (79年のカリフェスタにおける講演録掲載)
- ⑧ *Casa de las Américas*, número 130, 1982 (第4回カリフェスタにおけるジョージ・ラミンの講演原稿掲載)

以上のなかではとりわけ④, ⑥, ⑦が重要であろう。

註

- 1) 本稿は秋季連続講座「グローバル・ヒストリーズ——国民国家から新たな共同性へ」の第4回 2010年11月26日「カリブは周縁か」における「キューバでアンティールを考える」と題した発表に基づいて書き起こしたものである。
- 2) ムラート *mulato* とは、黒人と白人の混血のことを指す。
- 3) Guillén, Nicolás, “Palabras en el trópico”, *Obra poética (1922-58)*, Editorial Letras Cubanas, La Habana, 1985, p.122. 邦訳にあたっては、『ギリエン詩集』（飯塚書店, 1974年）を参照し、一部変更を加えた。
- 4) Piñera, Virgilio, “La isla en peso”, *La isla en peso*, Tusquets Editores, Barcelona, 2000, p.39.
- 5) 同上, p.46.
- 6) 「肯定の詩学」, 「否定の詩学」については, Pérez Firmat, Gustavo, “El sino cubanoamericano” en *Ensayo cubano del siglo XX*, Fondo de Cultura Económica, México, D.F., 2002. および, Rojas, Rafael, *Un banquete canónico*, Fondo de Cultura Económica, México, D.F., 2000. を参照した。本稿の着想においてこの二人の研究に多くを負っていることを特別に記しておく。なお, スペインの作家エンリーケ・ピラ＝マタスは『パートルビーとその仲間たち』（新潮社, 2008年）のなかで, ピニエーラを「否定の演劇」の作家としてとりあげているが, この着想も本稿の流れと無関係ではない。
- 7) レアンテ, セサル「その共和国の名は?」, 『現代キューバ短編小説集』, 時事通信社, 1973年, 80頁。
- 8) スペイン語の逃亡奴隷 *Cimarrón* の語源は, *cima* (頂上の意) という説がある。Real Academia Española, 第19版などを参照。
- 9) ちなみにコロンビアのカリブ沿岸地方にはサン・バシリオ・デ・パレンケ *San Basilio de Palenque* というアフロ系の集落が存在している。スペインの植民地体制から逃亡した人びとによって打ちたてられた集落である。
- 10) バルネ, ミゲル『逃亡奴隷』（学藝書林, 1968年）。著者としてバルネだけを明記するのは不当という考え方もあり, 英語版では「逃亡奴隷」エステバン・モンテホの名前も併記されている。なお, この書物はカリブ海の奴隷制度を考えるとときに貴重な資料であり, ガブリエル・アンチオーブ『ニグロ, ダンス, 抵抗——17～19世紀カリブ海地域奴隷制史』（人文書院, 2001年）でもたびたび引用されている。
- 11) 文学的な成果としては, たとえばホセ・レサマ＝リマの長篇小説『楽園 *Paradiso*』をあげてもいい。レサマ＝リマにとってキューバは「楽園」だった。
- 12) Piñera, Virgilio, “La isla en peso”, *La isla en peso*, Tusquets Editores, Barcelona, 2000, p.47.
- 13) そういう沈黙を読みとることを意図したのが, 先に註で触れたエンリーケ・ピラ＝マタスの『パートルビーとその仲間たち』である。